

なにわ大阪の「笑い」を考える

浦 和男

1 はじめに

「なぜ大阪が『笑い』の聖地（あるいは都）になったのですか？」、「どうして大阪は『笑い』好きなのですか？」は定番の質問である。一方、大阪の「笑い」の研究といえば、上方落語や漫才の芸人評で解き明かそうとする試みが多い。今日、吉本興業の発展とともに、大阪で「笑い」といえば「お笑い」であり、漫才であり、落語家の努力もあって大阪圏内どこでも落語寄席が催され、やはり大阪で「笑い」というと落語もということになる。大阪で演じられる漫才、落語を見た人々が笑うのであるから、漫才、落語の芸評で大阪の「笑い」を探る試みは決して無理ではない。しかし、東京圏にも「お笑い」はある。吉本は新宿、渋谷、神保町に劇場を開設している。落語も上野、浅草、新宿、池袋に演芸場があり、大阪の動楽亭のような両国亭も存在する。そうすると、東京からすれば、東京こそが「笑い」の聖地あるいは都ということになるだろう。東京も「笑い」好きということには代わりがない。東京でも多くの芸人が芸を披露している。

落語は早い時期から東西の交流が行われた。明治30年代には、江戸落語の衰退を心配する落語家たちが上方落語を受け入れ「移植」をする。その結果、江戸落語はみごとに最盛を果たす。一方、上方落語は、桂春団治の活躍をのぞけば、衰退の一途を辿る。新しいもの好きの大阪人は、古くさい落語よりも最新の活動に心奪われる。大正3（1914）年出版の『大阪独案内』（海陸運輸時報社編、海陸運輸時報社）に掲載された「興行場案内」には、東区19、西区41、南52、北34、合計146軒の興行場の名前がある。このうち、落語専門の寄席は5軒にすぎない。当時はまだ「万歳」あるいは「掛合」と呼ばれた現在の漫才や色物も扱う「寄席」は68軒、「活動」は41軒の名前を見る。こののち桂春団治の活躍で落語は脚光を浴びることになるが、それでも落語の人気は衰退するばかりである。

そのような時代の趨勢を見取ったのが吉本せいである。昭和5（1930）年頃から「万歳」の取り込みを本格化し、昭和8（1933）年に「漫才」を使用し始め、秋田実、長沖一らが「笑い」の近代化に取り組む。同じ年、東京の浅草では、古川緑波、徳川夢声らによって「笑いの王国」が結成されている。エノケンこと榎本健一、二村定一らも、この時期には東京の「笑い」の代表であった。二村は「ナンセンス小唄」と呼ばれる一連のユーモラスな歌を歌い、昭和7（1932）年に「百万円」のSP盤を出している。すでに昭和4（1929）年からは小学館と集英社から『現代ユウモア全集』が出版され、好調な売れ行きに、当初12巻の予定を全24巻に倍増される。東京の博文館が発行していた「新青年」誌では大正末年からユーモア小説や西欧ジョークを紹介している⁽¹⁾。昭和初期の大不景気の時代、昭和に改元した喜びと鬱積する苦しさを吹き飛ばすために、「笑い」が全国を駆け巡ってい

る。小林多喜二の特高による虐殺は昭和8年2月、そのような年に大阪でも東京でも、「笑い」が開花しているのである⁽²⁾。

しかし、東京と大阪の二都の「笑い」の在り方には、明らかに差がある。芸能という視点からすれば、東京こそが『笑い』の聖地にふさわしいだろうが、生活のレベルにおいては、東京と大阪の「笑い」の意識には明らかに温度差がある。東京文化圏も、もちろん「笑い」は好きであるが、大阪文化圏の「笑い」好きは生活に根ざしているといえる。大阪の「笑い」を考えると、芸評や芸人評で論じるのではなく、「どうして大阪は『笑い』好きなのですか？」という点を論じることによって大阪の「笑い」の本質を考察することがより必要となってくる。

本稿、また本特別研究で使用する「笑い」は、(1)身体反応としての「笑い」を引きおこす文化的現象、(2)人間の精神面に「おかしき」を生じさせる対象、を指すものとする。身体反応としての「笑い」の行為が狭義での「笑い」であるとすれば、広義で「笑い」を使用する。一方、「ユーモア」とは「おもしろさ」を生み出す見方、視点であり、知的な要素を多分に持つ。「笑い」と「ユーモア」は区別されるものであるが、本稿では「ユーモア」は「笑い」の範疇に含まれるものとして扱う。

2 「笑い」文化の流入—川の役割

大阪の経済発展に大きな役割を果たしたのが川である。行基の活躍も、川を存分に発揮した。江口を初めとして、遊里は川沿いに発達した。その川沿いの遊里で、「笑い」の文化は開花する。同時に、川を伝って、「笑い」の要素が「大坂」へと流入してきた。京からは淀川、奈良、大和からは大和川が文化を伝達する経路であった。奈良方面は金剛山系を超えて石川を下り、大和川へ出る経路もある。紀州、泉州、播州あたりは、海の道を通して大坂へつながっていた。経済交流のみならず、この川の道、海の道は「笑い」文化をも伝える道筋のひとつであった。

上町台地の元に徐々に町を形成し、都市として発展する大坂には、周辺の芸能村があった泉州、播州、京、奈良、大和からの出稼ぎ芸人たちが流入した。彼らは、新興の都市大坂へ、「笑い」を届けに出かけた。そして、大坂に武士階層が住まうようになり、各藩の番所ができると、地方の各藩からも地方の「笑い」が届けられることになっただろう。

小さな町であった大阪に、もともとの「笑い」の文化はなかったのではないか。まずは、町の形成、発展とともに寺内町として成立する前後に、川伝いに各地の芸能村から芸人が流入し、「笑い」の文化を持ち込む。その後、16世紀に豊臣秀吉が築城してから、芸能村の出稼ぎ芸人ばかりではなく、大坂に集まる武家階層も「笑い」の素材を持ち込んだはずだ。17世紀初頭までには、川の道、海の道を伝わって流入した「笑い」の素材は大坂町民に受容され、「笑い」の文化を熟成させることになる。もちろん、「笑い」は流入してくる文化現象の一部である。「笑い」の素材以外のものも流入し、淡路島、播州から伝わる人形芝居が「人形浄瑠璃」として成立するのは、その一例である。

江戸期に大坂で発生した「にわか」も、もともとは淡路島、播州あたりの喜劇であった可能性が高い。「にわか」の発生については、中村幸彦が詳しく検討しているので参考にさせていただきたい⁽³⁾。

江戸時代に大坂の川伝いに流入するものは、大坂に敵対する勢力ではなかった。江戸は天下の治世を司る場所として繁栄はするが、敵対勢力が攻め入るといふ緊張は高い場所であった。大坂は、敵対勢力に攻め入られるといふ心配の少ない場所であった。この違いが、同じ川と海の道を持つ土地でありながら、大坂が「笑い」を謳歌する土地となった理由のひとつであろう⁽⁴⁾。

もう一点、川に関して興味深い点は、川が文化の境界になっている事例である。大阪南部では、秋になると笛や鳴り物の音が聞こえだし、季節を感じさせる。夏の終わりにはだんじりの練習が始まる。大阪南部では、このだんじりは大きく3系統に別れる。まず、海側の泉州方面のだんじりでは、地車を曳き回して直角に曲がる「やりまわし」を見ることができる。威勢のよい漁師が多く、海辺の狭い道ならでは曳き方である。次に、河内長野方面、現在奥河内と呼称している地域のだんじりでは、狭い平地で地車をぐるぐる回す「ぶん回し」を行う。山間部で坂道の多い土地なので、「やりまわし」はできない。最後は、富田林方面の南河内のだんじりで、「にわかだんじり」と呼ばれる。地車の形自体が異なっており、小さな舞台が設置されている。そこで、にわかを演じたり、寸劇を演じたりする。この地車は石川以東の地域に見られ、研究者は「石川型地車」と呼んでいる。石川を境に「笑い」の要素が取り込まれる。以前、だんじりの研究者から聴いた話では、河内長野方面でも「石川地車」を作成し、にわかを演じたが、数年で地車を作り直した地域があったといふ。にわかを受けなかった理由は、よくわからないといふ。石川以東では、廃れた地域もあるようだが、今もにわか演じられている。千早赤阪村では、建水分神社の秋祭に地域の地車が結集し、奉納にわか演じられる。小沢昭一がおもしろい記録を残している⁽⁵⁾。

なぜ、石川以東でだんじりに「笑い」の要素が取り込まれているのか、まだ詳しい研究はなされていないようである。「荒ぶる素戔鳴尊が天照大御神を笑いで天岩戸から連れ出したことに倣う」といふ説明をしてくれた方がいるが、これは後世の後付けであろう。

一点注目すべきは、泉州、河内長野のだんじりの寄る神社は住吉大社系であるのに対し、石川以東の神社は奈良の広瀬大社系の神社が多いことだ。建水分神社は水神を祭る広瀬大社を中心とする大和の水脈に関する神社の一つである。広瀬大社系の神社は、春先におんだ祭を催し、そのさいほとんどの社で、「笑い」の要素を持つ演技を行う。廣瀬大社では2月11日の午前に「殿上の儀」と呼ぶ本殿での田植え神事がある。そこでは田人が滑稽な会話をなし参拝者を笑わせる。この滑稽な会話がもともとの儀の行為であるかどうかは、残念ながらわからない。午後は「庭上の儀」、通称「砂かけ祭」で、文字通り砂をかけあう壮絶な祭である。田人と牛が神田の砂を撒き、だんだんと境内の至るところで砂を撒き散らす。突然砂が降りかかってきて、境内は大騒ぎである。参拝者は我知らず笑っている。砂を雨に見立て、砂が多く撒かれるほど雨が多いと見立てる。あわせて、参拝者の「笑い」

を引き起こし、大きな笑い声が起こることを求める神事である可能性も棄てきれない。

このような文化境界の役割も川は果たしているのである。

3 「笑い」の定着—都市の空間構成との関わり

大阪の「笑い」が本格的に根付き始める時期は、天正 11（1583）年の豊臣秀吉による大坂築城以降であろう。築城には多数の人々の力が必要であり、多数の労働従事者が大坂に住み着き、その人々を目当てにした芸人たちが、川の道を伝って大坂に入ってきたであろう。残念ながら、そのような記録は見当たらないが、その頃の京では出雲の阿国が登場しようという時期であり、京の芸人や芸人崩れが日銭を求めて大坂に流れ込んで来たことはまちがいないだろう。慶長 3（1598）年に船場の開発が始まり、元和元（1615）年の大坂夏の陣の荒廃による本格的な都市開発を経て、寛永 6（1629）年までには大坂三郷の基本ができたとされる。元和 5（1619）年に京都・伏見の 108 町の町人が移住させられるが、平野、堺、伊勢の商人らも、船場に移住している。大規模な都市開発による多数の労働従事者の存在に加え、周辺に芸能の村を持つ堺や伊勢の出身者を目当てに「笑い」の芸人たちも流入してきたことは想像に難くない。故郷を離れた移住者たちも、故郷からの芸人を歓迎したことも否定はできない。この頃には、大阪は「笑い」の地としての芽が息吹き始めていた。

さらに遡ること 600 年前、京にはすでに「お笑い」芸人がいた。1060 年頃の成立とされる藤原明衡の『新猿楽記』には、呪師（のろんじ）、侏儒舞（ひきうとまい）、田楽（でんがく）、傀儡子（くぐつし）、唐術（とうじゅつ）、品玉（しなだま）、輪鼓（りうご）、八玉（やつだま）、独相撲（ひとりすまい）、無骨（ほねなし）、有骨（ほねあり）といった「頤を解く」芸人たちが描写されている。伊勢は伊勢萬歳と伊勢大神楽があり、「笑い」の要素を持つ芸を持っている。堺は、泉州の芸能の伝統がある。このような、何らかの「笑い」の要素を含む芸を持つ人々を身近に見てきた人々は、各地からの芸人を歓迎したはずだ。その他にも、播州、能勢、大和、河内の各地の芸人が大坂に集まって来た。

大坂三郷が成立する頃、寛永 3（1626）年に、道頓堀に芝居小屋の設置が認可される。道頓堀が芝居の町として成長すると同時に、芝居小屋に登場しない芸人たちも道頓堀に集まり、そこであぶれた芸人たちは、葦簀がけの小屋で芸を披露し、日銭を稼いだことだろう。およそ 100 年後の享保 5（1720）年の刊行と記される『鳥羽絵三国志』に、「まんざい」が描かれている。扇子を持つ男が、鼓を持つ男の頭を扇子で叩いている。「ここらてあみかさまはさうか」とト書きがある。銭を徴収しようということであろう。この時期には、このような「笑い」の芸が大坂市中に定着していたことがよくわかる。

このように、大坂は、その地が生まれた時から、「笑い」の要素を採り入れる素地があった。労働作業も商人も町人も、おそらく地方から派遣されて来た武士たちも含めて、移住者たちは、「笑い」の芸を懐かしみ、楽しむことになった。

そして、「労働作業も商人も町人も、おそらく地方から派遣されて来た武士たち」が、

混在した都市であったのが、大坂である。この大坂の都市の構成は、「笑い」を育む土壌を醸し出すことになる。

江戸と大坂の都市の構成を見ると、その違いは明らかである。江戸は、都市空間の中央に城が存在する。大坂は、都市空間の中央は「町」、それも船場であり、城は北東部の、いわば「町外れ」に存在する。

江戸は、「の」の字を書くように、中央から南東へ延びる線は南西に向かい、ぐるりと回り、南西から北東に向かって階層別に住居が配置される。城の北東と南西では住民の階層が異なるが、城が存在するために、その階層が混じり合う機会は少ない。この構造によって、明治以降の近代化が進む時期に、城の西側は高級住宅街の山の手であり、東側は「下町」として一般人の居住地として定着する。今でも、城であった皇居の南東は丸の内の官庁街であり、それが南西に向かって続くと国会議事堂にぶつかる。そして、市ヶ谷、飯田橋とぐるりと回ると神田明神へと行き着く。

住民階層を機能的に配置することで、職業階層も機能的な配置となる。明治に東京が近代として発展する際にも、その配置が生きた状態になっている。武士階層の居住地には官公庁、大手会社が置かれる一方、高等教育機関は水道橋、お茶の水方面を中心に置かれる。これは、元禄3（1690）年に湯島聖堂がこの地に建設されたことに由来する。江戸期に学問の地となったこの地域は、明治期に高等師範学校（現筑波大学）、女子高等師範学校（現お茶の水女子大）が置かれる。現在の竹橋には、東京外国語学校（現東京大学）、東京高等商業学校（現一橋大学）が建てられ、この地域から北東の本郷には東京帝國大學が設置された。多くの私学も、この地域に発祥の地を持つ。

さらに注目すべきは、江戸の一大歓楽街である吉原は、浅草の外れという、中心地から遠く離れた周縁の地に存在したことである。もちろん、品川、新宿、池袋、千住といった土地にも遊びの場はあったが、最大の歓楽街は町中には存在しなかった。

この都市構成で、「勤務空間」（高等教育機関を含む）、「居住空間」、「娯楽空間」は機能的に分割されている。つまり、働く場は働く場であり、暮らす場は暮らす場であり、遊ぶ場は遊ぶ場であるという、本来の役割がそのまま機能し、人々もそのように生活を区分することになる。そのため、「笑い」は「娯楽地」でのものであり、生活に「笑い」が根付かなくなったのではないだろうか。

東京が政治の中心地であり、政争の地であるがために、「笑い」が根付かなかったとも考えることはできる。だが、一般の住民は政治にも政争にも無関係であり、すべての人が「笑い」と無関係であったわけではない。むしろ、都市構成が縦割りされ、さらに住民も階層で区別されることで、お互いの交流が大坂のように進まなかった点に注目したい。また、さまざまな土地の人々が、とりわけ明治以降に流入してきたことも、お互いの交流を妨げる結果になったはずだ。ある土地の出身者がすべて同じ階層で固まるわけではない。ある土地の出身者は複雑に階層区分され、同じ階層内でも出身地が異なると相互の交流は、大坂ほどに多くはなかったと考えられる。地方による言葉の差異はもちろん、「笑い」どころ

も差異がある。現代においても、さまざまな地域出身の学生が交わる大学の授業でも、明らかに「笑い」どころに差が見受けられる。

大阪の都市空間の中心は、船場という町人の地域である。城の東側に町が発展せず、大阪湾に向かって西側を中心に都市開発が行われ、都市が発展することになった。現在の淀屋橋から道頓堀あたりの南北方向で約 2.7km、松屋町の手前から四つ橋の東西方向で約 1.5km、玉造から西長堀で約 4km、また、大阪城から四天王寺で約 3.8km と、大阪は決して広い都市ではない。一方、東京も、大手町から四谷が直線で約 3.3km であり、江戸自体は決して広い都市とは言えないが、中央に城があるために、南西方向を回って四谷に向かえば約 4.3km となる。

そして、船場を中心とする四角形の都市には、さまざまな階層の、さまざまな職業の人が混在していた。塚田孝は江戸時代の大坂の「褒賞」記録の読解から大坂という町を読み取る試みを行い、「大坂の経済的な発展とそれに伴う都市社会の成熟は、多様な職分・渡世・仕事を生み出し、その複合的な稼ぎによって都市社会下層民衆も何とか生きていくことが可能となった」ことを論じている⁽⁶⁾。大坂三郷の周縁地域、中心から外れた上町台地付近には武家と寺院が並び、また大阪湾側にも諸藩の蔵屋敷が並ぶ。蔵屋敷の荷の運び出しに従事するのは武士ではなく、肉体労働に従事する下層民衆である。武士も商人も町人も下層民衆も、この狭い都市空間で生活をし、空間が文節化されてはいなかった。

脇田修は、「大坂は、近世において天下の台所といわれたが、それは全国の市場の金融・流通拠点であるとともに、内部で生活必需品の生産を行っていた産業都市であったからだ」とのべ、「生活必需品」の内容として、木綿、油、鉄銅の金属、薬種などを掲げている⁽⁷⁾。さらに、その品々を売買する仲買人、運搬する人たち、その人たちに茶菓子を提供する茶店の店員などもおり、船大工、桶職人などの職人もいる。文政3（1820）年刊の『商人買物独案内』には、260丁、520ページ分に実にさまざまな商店が紹介されている。

「大阪は商人の町」だから、商売をするためには「笑い」は欠かせない、だから「笑い」の町となった、とは、大阪の「笑い」に関して説かれる説である。しかし、まず「商人の町」には疑問を持たざるをえず、商人に「笑い」は必要であったが、実際は、さまざま「職分・渡世・仕事」が絡み合うために「笑い」によってコミュニケーションが育まれた、と考える方が的確であろう。

もう一点、都市空間で注目されるべきは、江戸の吉原の位置に対する大坂の新町の位置であり、芝居町となる道頓堀の位置である。江戸は「娯楽空間」が中心から遠く離れた周縁であるが、大坂の新町は「勤務空間」、「居住空間」と不可分の位置にある。道頓堀も三郷の外れとはいえ、「勤務空間」と「居住空間」に密接した地域に存在する。

江戸では空間が機能的に文節化されているが、大坂の空間は相互に密接に絡み合う。むしろ、仕事の間、生活の間、遊びの間の区別がなかったわけである。遊びの間の「笑い」は、仕事の間、生活の間にも侵入し、どの場所でも「笑い」が不可欠なものなる。そのような「笑い」に対する態度の相違が、江戸と大坂にはあった。

「大阪のおばちゃん」の「格言」をまとめた森綾は「(大阪は) 巨大な村なので、人と人との距離が近い。見方を変えれば、わりと生きづらいところなのである。そこで人と人との距離を図りつつ、心地よく生きていくための術(すべ)が、おばちゃんに備わったとも考えられる。皆、なんとなくご機嫌を伺い、なんとなく放っておき、なんとなく困ったときは助け合うという、間のある関係性をつくっているのである。」⁽⁸⁾と指摘する。この点が大阪のおばちゃんの独特の表現を生み出した理由だと森は考えているが、同時に「笑い」を育むことになる理由であろう。興味深いことに、塚田は江戸期の「褒賞」記録を読み解き、「都市下層民衆の世界に存在する近隣のつながり、相互扶助の力」を見ている⁽⁹⁾。「相互扶助」は下層民衆間だけではなく、上層から下層への扶助もある。森が指摘する「間のある関係性」は、江戸時代に確立していたようである。

さらに、福沢諭吉が『福翁自伝』のなかで、「元来大阪の町人は極めて臆病だ。江戸で喧嘩をすると野次馬が出て来て滅茶苦茶にしてしまうが、大阪では野次馬はとて出でこない」と述べている⁽¹⁰⁾。坂東の荒地であった江戸っ子の粗い気質は、「火事とけんかは江戸の花」にも代表される。いやなことを笑いとばすよりは、はっきりと決着をつける方がよい。一方、さまざまな人々が直接に混じり合う都市である大坂で「間のある関係性」が育ち、大阪へと受け継がれる。この「間のある関係性」こそが、大坂、そして大阪で「笑い」が大切にされ続けた理由でもあろう。

4 リアリズムとユーモア

織田作之助が「大阪論」で「大阪が現実主義、いわゆるリアリズムの土地であることは、私も否定しない。」、そして「大阪的とはリアリズムを離れてあり得ない。」と書いている。

一方、「世相」で、阿部定の事件を取り上げ、哀れさの極まりが喜劇になったとし、日本の春画がユーモラスな筆致で描かれている理由を納得したとする。そして、「『リアリズムの極致はユーモアだよ』と友人の顔を見るたびに言っていたとも書いている。オダサクといえば、藤澤桓夫、秋田実、長沖一らと交流し、秋田と長沖のいる吉本の文芸部にいりびたっていた。彼は大阪の作家であると同時に、近代の漫才成立期にも関わった人物であるとおもしろい。彼の大阪ユーモア論は、今一度再検討の価値がある。「夫婦善哉」の最後で、めっきり肥えた蝶子の尻を描写するが、これなど「リアリズムの極致のユーモア」の典型であろう。それでいて、「グロテスク」の一步手前で止まっているところが、「大阪的」なのかもしれない。

「ぼんと襟を突き上げると肩が大きく揺れた。蝶子はめっきり肥えて、その座布団が尻にかくされるくらいであった。」

この直前の、柳吉と蝶子の「めおとぜんざい」についてのやりとりも漫才調であり、蝶子の発言は実に現実主義的なツッコミを決めている。夫がさも偉そうに理屈をこねるのに対し、妻が一言で言い返す。そして、その一言は現実過ぎて笑いを誘う。今でもなお市内各所で見掛ける光景だ。畢竟、「大阪はリアリズムの土地であり、大阪のリアリズムの行き

着く先は『ユーモア』であり、「笑いを生み出す」と考えても問題はあるまい。実際、大阪の「リアリズム」が「笑い」を生み出す要素になっているケースは多い。

大正 14 (1925) 年、大阪は「大大阪」へと発展した。それを記念して3月から1ヶ月半、大阪毎日新聞を中心に「大大阪記念博覧会」が開催され、展示場のひとつに「食料の大阪」が企画された。そこでの展示物が、大阪のおっさんの巨大な顔の人形である⁽¹¹⁾。

同年に出版された『大大阪記念博覧会誌』によれば、その巨大な顔の下に、大阪人の一日の食料の模型と消費量などを展示し、「食いだおれの大阪」を示そうと試みた。人形の大きさは1丈というから約3メートルある。灘萬の協力で、東区平野在の人形師濱中糸二郎が制作担当、開場の2日前にようやく完成した。記事を執筆した、当時大阪市立衛生試験所長藤原九十郎は「会期中本部門の中心出品はユーモアの中に有益なる知識を与ふる出品物として各階級の観覧者に非常の好評を博した」⁽¹²⁾と自画自賛している。まさに、「リアリズムの極致のユーモア」であり、「大阪的」である。

ちなみに、この年4月、オダサクは高津中に入学している（正確には、翌月5月に「鈴木作之助」から「織田作之助」に姓変更し、われらがオダサクが誕生する。）そして、藤澤と秋田は今宮中の同級生（そして武田麟太郎も）、長沖は天王寺中に在学中であった。2年前に砂川捨丸と中村春代のコンビがデビューし、この年には桂春団治が、あの「煎餅レコード」を売り出した。秋田実が英語ジョークに興味を持ち始める時期でもある。

「リアリズムの極致がユーモアを生む」、もう一つの例は、やはり初代「通天閣」であろう。藤澤南岳翁により「通天閣」と命名されたとはいえ、そのコンセプトは「パリの凱旋門の上にエッフェル塔を置く」という、よくよく考えれば不思議なものである。南岳翁は、その「しゃれ」をわかった上で「通天閣」と命名したのであろうか⁽¹³⁾。

明治 45 (1912) 年に、現在のスパワールド付近にあった「ルナパーク」とともに開園したのが初代通天閣である。ルナパークはニューヨークのコニーアイランドを模したアトラクション広場であった。凱旋門の上にエッフェル塔が乗っかって、その前がコニーアイランド。それが大阪市内のど真ん中にある。まさに「リアリズム」に徹し、詰まるところ「ユーモア」になる。

大阪は「漫画文化発信都市」であり、清水勲が『大阪漫画史』で大阪の漫画出版の歴史を詳述している⁽¹⁴⁾。江戸時代には耳鳥斎、戦後直ぐには赤本漫画、大阪は漫画を通して「笑い」を発信している。大澤研一は、江戸期大坂の「広告ツール」について「情報の伝達方法が限られていた時代である。引札の大量配布やロコミは有効な手段であったが、販売方法のユニークさとそれを生み出す柔軟な発想も重要である。」と指摘している⁽¹⁵⁾。ポスター、ちらし、あるいは看板などの視覚的な、リアリスティックな「笑い」や「ユーモア」も、もっと注目されるべき領域である。

リアリズムとユーモア、「笑い」を考えると、漫才についても再考する必要がある。なぜ、「漫才」が生まれ、人気を博し、一方、「上方落語」は衰退したのか。そもそも、「漫才」とは何であるのか。「漫才」も「落語」も、リアリズムを突き詰めたところに「笑い」

が成立する。しかし、昭和 8(1933)年に「漫才」が誕生するとともに全国を制覇し、わずかの時期に国策までに取り入れられるが、とくに「上方落語」は衰退の一步を辿るばかりであった。

同じリアリズムでも、「漫才」は現実に基づくが、「落語」は空想に基づく。「現実世界」のリアリズムは今を生きるリアリズムであり、大阪人の好むところを突く結果になった。昭和に入り、「モダン」な時代の到来とともに、サラリーマンが古風な落語よりも現代風な漫才を好む傾向を見抜いた吉本せいが、漫才に力を傾けたという事実は事実である。ラジオの時代にあって、仕方も「笑い」をとるために必要な「落語」が、仕方の見えないラジオで視聴者を楽しませるには無理があった。しゃべくりを中心とする「漫才」が「モダン」であり、「リアリズム」の世界で視聴者を笑わせることになったのである。

再び、福沢諭吉に耳を傾ける。福沢は東西の学問の質の違いにも言及している。江戸の学問は大名の御用や立身出世のためであったが、大坂は出世などとは無関係に学問を純粹に楽しむ。これは大坂に私塾が発達した理由でもある。このような気質も、古臭い型にはまった「落語」よりも、背広を着ていながらサラリーマンではない、自由な芸人のしゃべくり「漫才」が好まれた理由であるかもしれない⁽¹⁶⁾。逆に、背広を着ていながら仕事をしない漫才師の姿は、東京では好まれなかった可能性もある。

大阪の演芸を調べ、それを以てして「大阪の笑い」の研究では、まったく片手落ちである。演芸の「笑い」だけが、大阪の笑いではない。もっと、大阪の社会、町に根ざした「笑い」や「ユーモア」を再検討する必要がある⁽¹⁷⁾。

5 秋田実の「漫才」

前述のような都市空間の構造から育まれた「笑い」は、「漫才」を生み出すことになった。生みの親で育ての親は、秋田実である。

2017年度に高橋信三記念放送文化振興基金の研究助成に採択され、「関西大学総合図書館所蔵漫才、喜劇放送番組台本類の調査と活用」というテーマで研究を行っている。本学図書館には、漫才師島ひろしの旧蔵台本類 450 点程度と、長沖一の旧蔵台本類が 100 点程度所蔵されている。2017 年が秋田実の没後 40 年であることから、秋田実作の台本から調査を進めている。図書館史料の調査と並行して戦前の秋田作品にも目を通す中で、秋田が生み出した「漫才」とは何か、と考えることがある。「漫才」の名称について、橋本鐵彦は「漫談」の「漫」と考えたが、秋田は「漫画のような話」と考えていたようである。

明治 30 年代に玉子屋円辰が名古屋の音曲万歳にしゃべくりの要素を取り入れ、門付芸の「萬歳」から演芸の「万歳」に換え、だんだんとしゃべくりの要素が強くなって「高級万歳」や「高等万歳」と称されるようになる。しかしながら、猥雑な要素をネタとしたしゃべくりは官憲の目にもきびしく、「万歳」を「モダン」なものにしようとしたのがエンタツ・アチャコであった。昭和 5 (1933) 年に、藤澤桓夫と白石凡の紹介で、秋田実がエンタツと出会い、その後、昭和 8 (1933) 年に吉本が「漫才」と称したところから、現代の

「漫才」がスタートする。これが、一般的な説である。しかし、エンタツの出会いからしてはつきりしない点が多く、その後の吉本入社までの秋田の動きもよくわかっていない。

幸い、2017年に藤田富美恵が『秋田実 笑いの変遷』と題して、父秋田実の「笑いの変遷」を詳細に追いかた好著を上梓した⁽¹⁸⁾。この書によって不明の部分が、かなり明らかになってきたが、まだまだわからない点が多い。

秋田の「漫才」創作の方法は、いろいろな記事が残っており、また、藤田氏の話からも、いわゆる two-line joke が基本になっていることがわかっている。Aの発話に対してBが答えて「笑い」をとるジョークである。これを積み重ねて最後に大きなオチを取る、誰でも笑うことができる健全なネタを扱う、これが基本であろう。two-line joke は、必ずしも「ボケ」と「ツッコミ」の対立から成立する「笑い」ではない。そうすると、秋田実はAとBを「ボケ」と「ツッコミ」の対立として考えていたのであろうか。

秋田は、two-line joke に大阪人の会話を見ているように思える。「ボケ」の愚かさと「ツッコミ」の鋭さによるギャップの「笑い」ではなく、会話のキャッチボールのように、A-B-A-B-A...のやりとりを楽しませる芸を「漫才」としていたのではないか。

秋田に関しては、考えるべき問題が多数残っている。台本が実際に上演、放送されたのか、台本と実際の上演はどのように異なっているのか。秋田実の考えた「漫才」の在り方を、上演、放送の有無ではなく、また実際の上演との差異ではなく、台本をひとつのテキストとして読み取る作業が、まだ十分になされていないように感じている。「漫才」の当初の姿を考えることは、なにわ大阪の「笑い」の姿を考える上でも重要である。

6 今後の課題

これまでのなにわ大阪の「笑い」の研究は、芸という視点からの分析が中心であった。1950年代末からのテレビ放送開始後しばらくは、在阪局制作のコメディ番組が「お笑い」の「演芸放送」の時代を作り、「お笑い」界の「笑い」は大阪中心に発信される。1960年代にあっても、1970年代にあっても、その傾向は続き、「大阪＝『笑い』の聖地」という考えが定着してくるように見える。1980年に始まる「大漫才ブーム」では吉本興業の本格的な東京進出ともなるが、東京の漫才師も巻き返しを図る。それ以後、非大阪人の大阪発のお笑い芸人化、大阪出身者の東京での活躍が続き、東西の「笑い」の質の違いはあっても、なにわ大阪の伝統的な「笑い」を根底に持つ「お笑い」というものが薄らいで来ているように感じられる。

最近、ある年配の方から、「吉本大阪弁」という表現を用い、吉本芸人の大阪弁は不自然であり、「吉本大阪弁」が生み出す「笑い」は、なにわ大阪の伝統的な「笑い」とはかけ離れているという話を聞いた。また、別の方は、今のなにわ大阪の芸人は「笑い」を無理に作り出そうとしており、そこで生まれた「笑い」は不自然であると言い、「漫才」の東西の差は消滅しかけているのではないかと指摘する。

落語は、どうであろうか。本来「芸能」であるから東西差が無くなることはないが、落

語好きの面々が思うほどには身近なものにはなっていないであろう。大阪でも、ラジオでもテレビでも、落語番組は極めて少なく、落語家が登場してもバラエティー番組でのトークであり、落語を演じている姿を見ることは少ない。本格的な落語家の落語を聴こうにも、決して安い値段ではない場合が多い。その点で、なにわ大阪の「笑い」を考えるとときに、上方落語の「笑い」をもってして代表とできるかどうか。上方落語の「笑い」は、上方落語の芸としての「笑い」である。

すでに述べたように、漫才、落語を含む、なにわ大阪の「笑い」の質、「笑い」の文化を考えるためには、これまで研究者たちが枝葉末節のことから、あるいは、どうでもいいこと、として切り落として来た、大阪の町や社会、そして生活に根付いている感じ方や考え方に目を向ける必要がある。

しかしながら、厚生労働省が2017年12月に発表した「平成27年度都道府県別生命表の概況」⁽¹⁹⁾によると、大阪府の平均寿命は男女とも38位、東京は男性が11位、女性が15位である。男性の1位は滋賀で、京都は3位、奈良は4位、兵庫は18位で、女性を見ると滋賀は4位、京都は9位、奈良は16位、兵庫は25位である。和歌山が男性44位、女性41位となっているが、「『笑い』の聖地」である大阪の寿命は全国的に見ても低い。また、「ウーマンズラボ」は、国立がん研究センターがん対策情報サービスによる「悪性新生物全部位75歳未満年齢調整死亡率都道府県順位(2015)」(2017年5月発表)をわかりやすく一覧にまとめている⁽²⁰⁾。このガンによる死亡率表を見ると、大阪は男性で5位、女性で7位とともに上位に位置している。「笑い」は健康によいとされる中で、「『笑い』の聖地」である大阪は、「笑い」が健康によいわけではないことを実証しているようである。この点からも、なにわ大阪の人にとっての「笑い」とは何か、を再検討することが重要となる。

なにわ大阪の「笑い」を研究には、まだまだ考える点が多数残っており、今後ひとつひとつ丁寧な考察を深めることが重要な課題となる。

(うら かずお、研究代表者、人間健康学部准教授)

【注】

- (1) その仕掛け人は、「新青年」編集長であった横溝正史である。横溝は神戸生まれ、大阪で学び、関西風の「笑い」の資質を持っていた人物であった。大阪の雰囲気慣れ親しんだ横溝が、昭和初期の「ユーモアブーム」の仕掛け人であることは注目すべきである。
- (2) 昭和9年9月5日東京朝日新聞朝刊のラジオ欄の番組案内に「今ばんのお笑ひは関西自慢の萬歳」という記事がある。この頃すでに「お笑い」という表現が使用されていた。
- (3) 中村幸彦 1983 『中村幸彦著作集 第十巻 舌耕文学談』 中央公論社、を参照。
- (4) 東と西の「笑い」を考えると、いわゆる「笑い祭」は現在本州西日本にだけ確認され、東日本には存在しないなど、東西の「笑い」文化の在り方を今後もっと考察する必要がある。本稿で論じる「緊張感」の有無だけではなく、東西の「笑い」に対する感覚の違いの影響も、今後考察しなければならない課題である。

- (5) 小沢昭一 2006 「くわがいとしの河内」の巻 『日本の放浪芸 オリジナル版』
岩波現代文庫
- (6) 塚田孝 2017 『大坂 民衆の近世史』 ちくま新書 p.187
- (7) 脇田修 2003 「大坂への移出入商品」 『図説大坂 天下の台所・大坂』 学研
p.86
- (8) 森綾 2017 『大阪のおばちゃんの人生が変わるすごい格言一〇〇』 SBクリエイティブ p.27
- (9) 注(6)、p.166
- (10) 引用は、『福翁自伝』(岩波文庫) p.69による。福沢諭吉の緒方塾在学は安政4(1857)年頃である。
- (11) 大阪市立図書館デジタルアーカイブで絵葉書が紹介されている。
<http://image.oml.city.osaka.lg.jp/archive/detail.do?&oml=0000508284&pNo=8&id=478>
(大阪市立図書館デジタルアーカイブ <http://image.oml.city.osaka.lg.jp/archive/>)
- (12) 大阪毎日新聞社編 1925 『大大阪記念博覧会誌』 大阪毎日新聞社 p.166
この時期の大阪のエリート層には、「ユーモア」という用語と概念が理解されていた点も興味深い。
- (13) 同じく大阪市立図書館が絵葉書を公開している。
<http://image.oml.city.osaka.lg.jp/archive/detail.do?id=545>
- (14) 清水勲 1998 『大阪漫画史』 ニュートンプレス
- (15) 大澤研一 2003 「センス溢れる広告ツール」 『図説大坂 天下の台所・大坂』
学研 p.91
- (16) この学問の気質は、江戸落語と上方落語にも繁栄していると考えられる。江戸落語には前座、真打といった「階級」があるが、上方落語にはない。その点で、上方落語は「自由」である。「階級」があるからこそ一門の継承が続いた江戸落語は、戦争中も戦争後も持ちこたえてきたが、自由であった上方落語は没落の危機に瀕することになった。
- (17) やはり、愛すべき「大阪のおばちゃん」たちの言動やファッションは、「リアリズムの極致」であり、「ユーモア」ということになるだろう。
- (18) 藤田富美恵 2017 『秋田実 笑いの変遷』 中央公論新社
- (19) 「厚生労働省 平成27年度都道府県別生命表の概況」
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/tdfk15/index.html> 2017年1月31日確認
- (20) 「ウーマンズラボ 【最新】がん死亡率47都道府県別ランキング」
<https://womanslabo.com/marketing-20170721-2> 2017年1月31日確認